

【図書紹介】

田辺繁治『生き方の人類学 実践とは何か』（講談社、2003、p. 261）

種村 文孝

<Book Guide> Tanabe Shigeharu, Anthropology of Life -What is Practice?-, 2003

TANEMURA, Fumitaka

1. はじめに

本書は人類学者の田辺繁治による著書であり、実践とは何かに焦点を当てながら、実践と社会との関係を明らかにし、いかに実践をとおして自己を統治できるかに迫ろうとするものである。ここでは、本書の人類学的な概要とともに、生涯教育学の視座から内容を紹介していきたい¹。

『生き方の人類学 実践とは何か』というタイトルにもある通り、本書は実践とは何かを検討して、生き方やアイデンティティへと迫っていくことが目指されている。ここでの実践とは、非常にあいまいなものであり、本書の序章冒頭でも、「『実践』あるいは『実践する』という日本語は不思議にとらえにくい言葉である。それは政治行動から日常生活における行為、行動、営みにいたるまで、あまりに幅広い対象を指示するためだろう。さらに、そのむつかしさは実践という言葉の意味と用法が理解できたとしても、哲学、心理学、社会学、人類学、自然科学などの専門分野においてきわめて異なった使われ方をするということにも原因がある。」²と述べられている。本書はその実践とは何かという問いに焦点をあてながら、実践と社会との関係を明らかにしていくものである。

本書全般を通して、「実践とは何か」という問いへの著者のこだわりが強く伺える。人類学者の捉えるこの実践へのこだわりは同時に、生涯教育学を研究する者にとっても避けられない重要な問いである。それは、生涯教育に携わる者が、社会の中での実践と向き合っていく上で直面するものだからである。一般に、理論と実践で対比されることはあるが、実践の視点が抜けている理論は、机上の空論となり役に立たないものになってしまうだろう。社会の中での様々な教育実践をどう捉えていくのか、どのようにしたら実践を変えうるのか、実践とはどのように生まれるものか。それらを考える上でも、「そもそも実践とは何か」という問いは重要であり、いかに実践を変えていけるか、いかに生き方を変えていけるかということにも、示唆を与えるものとなるのである。

生涯教育における「実践」は幅広いが、具体的な例として専門職養成の実践を検討したい。専門職には例えば、医師、法曹、学芸員、社会福祉士など、様々なものが考えられるが、そうした専門職が「一人前」になるには、知識、技術、態度の各々の側面が必要である。それも、単なる知識の習得にとどまらず、「できるようになる」ことが重要である。各々の専門領域における作業や仕事といった「実践の習得」をどのように考えていけるのか、深めていきたい。また、そのような作業や仕事といった実践を身につけるための教育もまた、「教育実践」という形を取るがゆえに。「実践とは何か」という問いと密接に関わってくる。本書で提示される「知はいかに身体に宿るか」という問いもまた、実践を読み解く重要な鍵となっている。

以上を踏まえ、本稿では、実践とは何かについて人類学を中心とする議論を踏まえつつ、専門職養成の実践において、専門職がその職業上の実践を身につけるプロセスで何が作用しているのかを検討することとする。

2. 著者について

著者の田辺繁治について、本書の著者紹介と国立民族学博物館のホームページ³の内容をもとに紹介したい。1943年、静岡県生まれ。京都大学大学院を経て、ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院博士課程を修了。職歴は、国立民族学博物館第二研究部教授、国立民族学博物館民族文化研究部教授、タイ国チェンマイ大学社会学部客員教授を経て、本書執筆時は国立民族学博物館民俗学研究開発センター教授であった。専攻は社会人類学で、北タイの仏教および霊媒カルトの研究、タイのHIV/AIDS自助グループの研究、実践知の理論的研究、物質文化と消費の民族誌的研究を行ってきた。主な著書として、『ケアのコミュニティ-北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』（岩波書店）、『Ecology and Practical Technology』（White Lotus）などがある。

本書も、実践というごく日常的な活動について、人類学の視点から理論とフィールド研究をもとに明らかにしていくもので、取り上げられているのは、著者のフィールドでもあるタイ北部地方チェンマイの2つの民族誌である。

3. 本書の概要

主な目次は次のとおりである。

- 序 章 実践とは何か
- 第一章 実践知の系譜
- 第二章 実践を生み出す母体 ―ハビトゥス
- 第三章 実践コミュニティ

第四章 儀礼における実践 –北タイの霊媒カルト

第五章 苦悩の中の実践 –エイズ自助グループ

第六章 アイデンティティと生き方

人類学では、社会的に構成され、慣習的に行われている行為や活動のことを「実践」(practice)と呼ぶ。この人類学的な意味での実践という言葉は、人びとの行為とその経験とが、社会関係と分かちがたく結びついていることを表しており、その意味で、実践とは<社会的実践>にほかならないとされている⁴。ここでまず注意が必要なのは、慣習的に行われているという行為や活動を実践に含めるという点である。たとえば、「教育実践」や「実践例」のような形で教育学者が実践という語を用いる場合、自覚的な決断や意識的に組織された行為を指すことが多いと考えられ、慣れ親しんで用いる実践という用語のとりえ方と異なるからである。この点について、田辺は、一般に日本語で「実践」とは、人間個人が自覚的に明確な意図をもって行う行為を指すことが多いと指摘している⁵。それに対し、人類学という実践概念は、自覚的あるいは意図的な行為さえも、社会的に構成される慣習的な実践と接合していることを前提とするものである。田辺はそれゆえに、意図的な行為であろうと無意図的な行為であろうと実践に含めるという立場から、実践とは何かという問いに取り組んでいる。

そこでは、実践そのものに内在する知は、<実践知>と位置づけられる。田辺は「知識は本に書かれたようなモノではなく生きた身体に宿っている。(中略)私たちの日常生活のあらゆる場面で働いているのは、この実践知にほかならない。私たちは知識を操作しているのではなく知識を生きているのである」と述べている⁶。知識が「生きた身体に宿っている」という表現は、実践を理解する上で鍵となる考え方である。

本書の第一章から第三章では、「実践」と「実践知」が、思想史的に跡づけられている。実践知のルーツとして挙げられているのは、古代ギリシャのプラークシスである。プラークシスとは、それを行う人の人格と一体となった活動を指しており、その活動自体に「良く行う」という目的が含まれるものである。これは、学問的・理論的な観想<テオリア>、および技術的・技芸的な制作活動<ポイエーシス>と区別されており、古代ギリシャにおいては、自由な市民にのみ許された言説と討議をもって行う公共的な活動のことであり、政治的な活動でもあったとされる。

そのプラークシスを支える実践知が、<プロネーシス>(知慮)である。プロネーシスとは、人間の実践状態を巧みにコントロールしていくことを支えているものであり、正しい目標を目指す倫理的卓越性とその目標に臨機応変に到達する技法の結合であると述べられている⁷。プロネーシスはまた、「良く行う」という視点や徳、倫理的卓越性を含むものであり、技をその状況と目標に合わせて選択し、実行していく知であると考えられる。それは、無意図的なものというよりも、自覚的に明確な意図をもって行う活動であり、日常的に用いる「実践」とそこではたらく「実践知」の意味合いに近い。

田辺は次に、古代ギリシャのプラークシスとプロネーシスに始まる実践知の概念の変容を、ライルの方法知、ウィトゲンシュタインの実践知、ブルデューのハビトゥス概念と実践理論、レイヴとウェンガーの実践コミュニティを手がかりに概観する。そこで明らかになっていくのは、これらの論者たちの「実践とは何か」という問いに対する格闘とともに、彼らが人類学者の対象とする「実践」とどのような距離をとっていかをめぐる試行錯誤の歴史であった。古代ギリシャの実践知は、近代において、①科学技術の発展が、人間行為の善し悪しを判断する実践的プロネーシスを徹底的に排除する方向で進んできたこと、②＜実証主義＞と呼ばれる、客観的な観察による論理的な記述と分析に基づく科学的な学問スタイルで実践をとらえようとしていったこと、の二つの潮流の中で衰退していく。そのような経緯の中で、実践とは何かという問いと、研究者が実践にどういう立ち位置で臨むのか、とに関わる葛藤が生まれてきている。

以上のように、実践とは何かを考えると、社会や文化の影響を切り離して考えることはできない。古代ギリシャの実践は、公共的な活動として社会と関わっていた。だが、人類学者が考える実践は、社会的に構成され、慣習的に行われている行為や活動のことを指し、幅広い。私たちが歯を磨くことも、服を着ることも、神社にお参りをする 것도「実践」とみなされるのである。それは、意図して行うこともあれば、無意図的な慣習の中に位置づけられていることもある。ライルは実践を生み出す能力を「特定の個人に帰属する傾向性」として記述し、訓練の繰り返しによって到達する「達人の知性」としたが、私たちの日常生活の「実践」には、慣習のなかの反復をとおして生み出されるものもある。そうした慣習的な行為と訓練によって形成される理知的な行為を区別せずに、慣習と訓練が規則に従う実践を生むと説明したのがウィトゲンシュタインであった。ウィトゲンシュタインの考えでは、慣習の中でくりかえし訓練されることによって実践が生まれ、それは協働的な基盤をもつ社会的実践であることが明らかにされる。「規則」を考えると、そこには他者との関係を前提とする協働性や社会そのものが前提とされるからである。

他方、ブルデューは、社会と個人の関係を＜ハビトゥス＞と＜傾向性＞の関係として新たな視点から捉えていった⁸。ハビトゥスとは、「あらゆる思考や行為を無限に生み出していく内面化された生成文法である」とされているが、それは、「個人の傾向性の集合である」とも捉えられる。ここでいう傾向性とは、個人の行為のなかに構造が組織化あるいは体制化されることであり、知識、能力や行為が社会的関係を抜きにして個人の所有に帰属するとは考えない。社会と個人がリンクする局面での身体をもった個人が焦点となり、傾向性は身体化されるものであると考えるのである。

以上の論理はかなり難解であるが、実践を社会的関係と身体を重視してとらえていることが伺える。田辺は実践知の特徴として、「知恵ある無知」という熟練者自身がどうしても語りきれない知を挙げているが、実践や知恵が「身体に宿る」という側面、暗黙知ともいえるものを含んでいることは、重要な視点であろう。

なお、田辺はブルデューへの批判として、＜身体化＞以外の思考がいかに実践を生み出すかにほとんど踏み込んでいないという点をあげている。また、レイヴとウエンガーの実践コミュニティという理論を用いて、実践知の習得や技能の獲得をコミュニティへの参加、交渉、協働といった人びとのアクティブな相互行為をもとに、実践を理解する視点にも触れている。さらに第四章、第五章では、具体的に北タイの霊媒カルトやエイズ自助グループを取り上げ、人類学的な視点から、実践がどのように行われているか、どのように生成しているかを考察している。

4. 専門職養成の実践への示唆

実践とは何かについて、人類学では、社会的に構成され慣習的に行われている行為や活動のことと捉えているが、生涯教育学の視点からは何を求めることができるであろうか。ここでは一例として、専門職が職業上の実践を身につけるプロセスを考えてみたい。まず、専門職の職業上の実践について、意図的な行為と無意図的な行為それぞれの視点から捉えてみよう。たとえば、専門職としての弁護士の場合、法廷での立ち居振る舞いは、どのような声や態度で訴えるかを意図的な行為とみなすこともできるし、裁判官が話している時に「黙って座っている」という行為を、無意図的な実践ととらえることもできるであろう。このように、専門職の実践知を考察する際にも、教育や訓練によって、意図的に教えたり学習できたりする側面とともに、慣習によって無意図的に身体化されている側面をもあわせて、専門職的な実践とみなしていく必要があるだろう。「知は身体に宿る」という実践知の特徴が示唆的である。

専門職養成においては、講義や本からの学習だけでは、その実践知を身体化することは難しい。法曹養成過程において、実務教育や体験学習が重視されるようになってきたのは、その反省からでもある。法廷での振る舞い、論理的な説得、クライアントの要望を把握すること、これら1つ1つの実践は、身体を伴い、実際に行う行為を行なってみて習得できるものであるし、熟練していくことでもある。実践コミュニティの理論は、徒弟制をもとに生まれたものでもあり、新参者が先輩や熟練者の行為の模倣や下積み作業から多くのことを学んでいるメカニズムが明らかにされる。実践を生み出すのは、相互交渉であり、意味の生成である。先輩や熟練者の振る舞いや実践と、自分の振る舞いや実践を比較し、その1つ1つの行為に意味を見出ししていくことが学びにつながり、新たな実践を生む。そのような視点を専門職養成に関わる者がもち、意味の生成や相互交渉が起こりやすい環境を整えることは重要であろう。専門職養成の課程では、知の身体化をいかに助けることができるかという視点が求められると考える。

また、専門職養成においては、置かれた状況や文化の中での学習が行われているということにも、自覚的でなければならない。本書で言及されたライルは、方法知を個人の知性ととらえ、慣習のくりかえしを軽視していた。だが、この慣習のもつ力、状況や文化、規

則がもつ力の大きさに気づく視点も必要である。たとえば、医師という専門職の実践が置かれている状況や文化はどうであろうか。命に関わり一刻を争う手術室では、素早い判断、「あうんの呼吸」、正確な執刀が求められるし、これらには、経験を通して自然と身についていく部分もある。また、子どもを患者とする小児科では、子どもに受け入れられやすい声かけや振る舞いといった診察技法や態度が無意識的に身についていくといったこともある。そういった実践の場をとりまく力関係や文化、慣習などが実践にあたえている力にも、意識的でなければならないと考える。

古代ギリシャの実践は、倫理的卓越性を含むものであり、「良く行う」ことに目的があったとされる。そこでの「実践」は、人格的な行いをも含んだ概念からスタートしたが、科学と技術の重視という近代の思想によって、人間行為の善し悪しを判断する実践知が衰退してきた歴史をもつ。単に科学や技術といった客観的な側面が重視されてきて、それに対する問題提起も行われてきた。この問題意識は、専門職養成にもあてはまるものであろう。効率的に多くの専門職を養成しようとする、知識や技術の一方的教授や詰め込みとなったり、資格試験を設けて客観的な知識や技術でその資格を授けたりしがちである。専門職の養成においては、知識、技術、態度のそれぞれの側面において教育的対応が必要なのであり、とりわけ、専門職に求められる態度や価値観をいかに育成するのかは、重要な課題である。実践知が倫理的卓越性や人格的な行いを支える知も含むものであるという視点は軽視してはいけないと考える。

現代社会においては、いかに豊富な知識を持ち、優れた技術を持つ医師や弁護士であっても、社会的な責任やプロフェッショナルとしての自覚や価値観が培われていなければ、優れた実践を行うことは困難であろう。むしろ、格差社会の到来や価値観の多様化など、社会がより複雑化し、専門家の果たす役割が大きくなる中では、責任感や自覚の欠如はより一層、犯罪行為やミスなどの誤りにつながる危険性も含んでいる。このような中で専門職の「実践」を理解しようとするとき、客観的に判断できる専門職の技術や知識だけではなく、専門職の人間の態度や価値観といった人間らしさとそれに影響を与える文化や社会の複雑さに向きあうことが、専門職養成に携わる者に求められる姿勢であろう。

5. おわりに

著者は、人類学者の学問としての実践と人類学者が対象とする人びとの実践とはどのように関係しているかも問うてきた。そして、暫定的な回答としながらも、次のように位置づけている。「人類学者の実践のすべては彼/彼女が対象とする人びとの実践と同一地平で行われているのであり、人類学者は自己の行いに不断に立ちかえることによってしか彼らを理解できないということだ。さらに、そうした再帰的な反復運動を維持しながら彼らへの理解に達することは、自らの主体の形式を少しずつ、あるいは大胆に転換する可能性を追求することでもある。⁹⁾」と。ここには実践に向き合う真摯な姿勢が現れているので

はないだろうか。そして、この問いと姿勢は、生涯教育を研究する者にも突きつけられるものである。教育学者は自己の行いに不断に立ちかえることによってしか、対象者を理解できないということである。専門職養成に限らず、様々なフィールドで、実践を理解しようとする試み、実践を生み出す試みが行われている。各々の現場、フィールド、実践とどう向き合っていくかを考える上では、自分自身の実践に自覚的であらざるをえないだろう。各々のフィールドでの学び、教育を考えると、そこには社会や文化の力も働いていれば、人間個人の意志も働いている。その実践の奥深さと対峙する人の奥深さと向き合いながら、自分は何者か、自分の実践は何かを問い続けることは、アイデンティティや生き方を問うことそのものであると考えられる。教育者として、学習者として、研究者として、様々な立場から、実践とは何かについて真摯に考えさせられる図書ではないだろうか。そして、もう一つ、知識は生きた身体に宿るという視点に立てば、考えるだけではなく、いかに実践や生き方を変える行動に移せたかも忘れてはいけない点であろう。

¹ 2013 年度の京都大学大学院教育学研究科の授業「生涯教育学研究Ⅰ」（後期）で本書を取り上げ、生涯教育学の視点から検討しながら読み進め、議論を行ってきた。ただ非常に残念ながら、本書は 2014 年 1 月 20 日現在、販売されていない状況である。

² 田辺繁治『生き方の人類学 実践とは何か』講談社、2003、p. 8。

³ <http://www.minpaku.ac.jp/aboutus/pe/tanabe/index>、2014 年 1 月 20 日最終参照。

⁴ 本書、p. 11。

⁵ 同前。

⁶ 本書、p. 14。

⁷ 本書、p. 36。

⁸ 本書、p. 89。

⁹ 本書、p. 26。